

〔研究ノート〕

米国福音主義神学会における

編集史批評の可能性と限界をめぐって

田中智恵

〔序〕

一九七八年から八三年にかけての六年間は、ある意味でアメリカ福音主義神学会にとって試練の年であった。⁽¹⁾ 当時福音主義神学会の会員であったロバート・ガンドリー (Robert Gundry) が、米福音主義神学会西部地区部会での「マタイ・二章についての発表を行ったのであるが、ガンドリーは、マタイがその福音書をマルコ及び拡大Q資料のミドラッシュとして書いたのだと主張したのである。同時にガンドリーは Expositor's Bible Commentary のマタイ福音書の注解を執筆する予定であったが、ガンドリーの提出した注解を編者 F・E・ガブリン (Gabelin) は拒否、結局 D・A・カーソン (Carson) がこれを書き、出版されるに至った。ガンドリーのマタイ福音書注解も、一九八二年 Erdman から出版された。

一九七九年、米国福音主義神学会の理事会はこれを重く見、トロント大学の R・ロングネッカー (Longenecker) を

指名、ガンドリーと話合うように依頼し、ロングネッカーは三年間にわたりこれに努めたが、ついにその基本的思想と方法論を変更させることができなかった。当初、福音主義神学会の理事会は、その性格上、ガンドリーを脱会させる権限を持たないと考え、先のロングネッカーによる説得の他、神学誌上での議論等、様々な場を設けたが、一九八三年、ついに脱会届け提出をガンドリーに依頼、ガンドリーもこれを承諾して同学会を去ったのである。

ガンドリーの用いた方法は、厳密に言えば福音書の文学ジャンルをめぐるものであるが、⁽²⁾ 一般には、行き過ぎた編集史批評⁽³⁾と理解された。確かにその方法は、編集者マタイを全面に押し出しているし、第二次世界大戦後登場したこの新しい批判学なくしてはガンドリーの研究も生れなかったであろう。ガンドリーの事件は、福音主義陣営の聖書解釈に様々な波紋を呼び起こした。編集史批評は、その発生以来約四十年を経た今も、その定義も方法論も、そして評価も一致を見ることができないにも拘らず、多くの聖書注解者が、そこに新しい、聖書の真の理解に迫る可能性を見い出して、多大な影響を受けている批評学なのである。

そこで本稿では、現在のアメリカの福音主義神学会に属している、あるいは属することのできなくなった聖書神学者たちの編集史批評に対する理解を紹介し、その有効性と限界を探っていきたいと思う。米國福音主義神学会を例にとるのは、先のガンドリー事件が編集史批評の持つ問題性を端的な形で示したからであり、編集史批評という、今なお新しい、そして多くの微妙な問題をはらんだ批評学にたいする、同学会の「良識」を知ることが、我々の今後の編集史批判の理解又は使用に一つの方向性を示唆してくれるのを期待するからである。

本来ならば、先ず編集史批評の定義から始めるべきであるが、定義それ自体に関しても多少の理解の違いがあるので、それぞれの研究者の項でそれに触れたいと思う。

編集史批評を巡る様々な理解

A ロバート・トーマス

米國の福音主義神学会で、最も保守的と思われるグループの人々は、編集史批評に対し否定的である。タルボット神学校はその代表的なものである。

一九八五年十月十八日号のクリスチャニティ・トゥデイは、「Redaction Criticism: Is it worth the Risk?」という興味深い題で福音派神学者たちによる対談を掲載した。大勢が、その危険性を認めつつも、編集史批評に対し受容的だったに対し、一人、紙上参加のみしたタルボット神学校のロバート・トーマス (Robert Thomas) は、現在一般的に用いられている編集史批評は、歴史的に見て、その発生と過程で自由主義神学の波をかぶっているので、安易にそれを用いてはならないと強い警告を発する。トーマスは、編集史批評⁽⁴⁾、という言葉を用いることに対してさえ反対し、あくまでも伝統的な歴史的文法的解釈を主張する。その中に従来、福音書記者の神学、独自の傾向を認める解釈があったというのである。⁽⁵⁾

トーマスの編集史批評の定義は以下のようである。「Redaction Criticism is a method of Biblical Criticism which seeks to determine the evangelist's point of view by ascertaining the creative editorial work carried out by him on his sources.⁽⁶⁾」ここに三つの基本的思想を見る。⁽⁷⁾ 第一に編集史批評は福音書記者を単なる歴史家ではなく、伝承の収集者でもなく、神学者として見ている。第二に編集史では、記者は自身の神学的目的のためならば、彼に伝えられた伝承や史実から離れてもいいと考えられている。第三に編集史批評は伝承と記者自身の貢献を切離すこ

とを指向する。その意味で編集史批評は文献批評、様式史批評の子である。トーマスによると、編集史批評のゴールは三つである。⁶⁰ 第一に記者をその資料から切離すこと。第二に記者の編集的解釈と、神学的視点を分析すること。第三にその目的、神学をそのまま明らかにすることである。このトーマスの理解が完全に正しいなら編集史批評は聖書⁶¹の道具としてよりは批評学そのものとしての性格を色濃く持つであろう。

トーマスは現在福音派で行われている福音書の編集的理解を四つの範ちゅうに分ける。⁶² 第一は「選択」である。福音書記者は、イエスの生涯について彼らが知っていたすべてのことを書いた訳ではない。彼らは自分の書くこととする⁶³ものに最もふさわしい出来事を、その中から選んだのである。第二は「順序の変更」である。福音書の記事は必ずしもイエスの生涯を時間的順序に沿って反復している訳ではない。例えば同一のテーマの説教は、異なった時に話されたことであってもまとめられたように、福音書記者が意図的に順序を変更することはあったのである。第三は「変更」。⁶⁴ この中には消極的変更と積極的変更が考えられる。消極的変更は用語や文体の変更であり、積極的変更ではイエスの時代の状況を描写するというよりも記者自身又はその属した共同体の神学的関心に合せて、物語を作り変えたとする。第四は「創作」である。これを認める福音派の学者たちは、福音書記者は、もしそれが史実との連続性を持つならば、記述において創作性を働かせてもよいと考える。トーマスは福音派の編集史批判に許されるのは第三のカノゴリーの消極的変更までだとする。⁶⁵ しかしながら、もしそこが限界だとするならば、第一、第二、そして第三の消極的変更までの、福音書の編集史的解釈は、何も、編集史批評、などという言葉を使わなくとも福音派の聖書解釈が伝統的に行ってきたことだとトーマスは主張する。順序の変更の理由については福音派が一世紀も前から考えていたことであるし、⁶⁶ 語彙、文体に著者の個性が表われていることは福音派の聖書霊感と矛盾しない。しかし編集史批評を用いる時、そこに必然的に第三の積極的変更、また第四の創作まで福音書記者に見てしまうという危険性をトーマスは警戒するのである。福音書の歴史性を守ること、聖書の霊感を信じる⁶⁷ことが、彼にとっては最も重要なことである。そのため、トーマスはガンドリーはおろか、福音派の中で一定の評価を得ているW・L・レーン(Lane)、⁶⁸ I・H・マーシャル(Marshall)なども、福音書の歴史性を縮小したとして切る。⁶⁹

何が福音書の歴史性か、何が聖書の霊感かという問題は、それだけで議論百出の大テーマであり、その理解の違いを巡って編集史批評へのアプローチの違いが生じているのであるが、一つの疑問として、編集史批評の登場なくして福音書記者の神学にこれほどの関心をもたれたであろうかと思わされる。しかしそれだからこそ「編集史批評は、われわれをイエスに近づけることをせず、福音書記者に近づけた⁷⁰」というトーマスの言葉は意味を持つものかもしれない。

B D・A・カーソン

D・A・カーソン(Carson)はトリニティ神学校の新約学教授であり、編集史批評を注意深く使っていることと立場をとっている。

カーソンは、編集史批評のなしてきた貢献のすべての要素は、理論的には他の方法で見つけ出すことが可能であったが、実際にはおそらくできなかったと主張する。⁷¹ 編集史批評は聖書解釈に大改革をもたらさないが、一つの助けとなる。この意味でカーソンの編集史理解は消極的支持ということになる。

カーソンは編集史批評の定義についても統一的なものがないことを指摘する。その中で最大の問題となるのはやはり創作の問題である。カーソンは「Redaction Criticism: The Nature of an Interpretive Tool」の中でN・ペリン(Perrin)とS・スモリー(Smaley)の定義を比較している。ペリンは編集史を「伝承材料の蒐集・配列

・編集・改変に見られる著者の神学的関心、また、新しい材料の創作、あるいは初代キリスト教における諸伝承の枠内における新しい様式の創造に見られる著者の神学的関心にかかわっている。この方法論は編集史と呼ばれているが『創作史研究』と呼ばれても差支えない。なぜなら、この方法論は既存の伝承を扱うと同時に、全く新しい材料の創作や、編集された材料の配列とか新たに創作された材料を新しい伝承断片や構成に組み入れていくことにかかわっているからである。¹⁰⁴（傍線筆者）他方スモーリーは編集と創作を区別する。「……実際、編集史と創作史はお互いに近いかかわらず、厳密に言うると二つの違った分野である。編集史批評は福音書記者によって伝承に加えられた観察できる変更を研究し、創作史研究は、記者の神学的理解または関心によって生じた変更を考察する。何人かの学者たちは『創作』という言葉の中に、福音書記者によって全く新しく作られた言葉がイエスの言葉として含まれていることを認める。」¹⁰⁵

カーソンによれば、どちらの立場にも問題が生じる。前者の場合、福音書のどの記事を継承された伝承、どの記事を記者の創造とするかという規程が必要となってくる。後者についてはそれ程厳しく定義すると、現存する福音書がそのまま伝えられたものと考えられ、しばしば保守派の中に見られるようにある出来事が福音書によって違った場面で起こっていることを編集史の枠内では説明できず、それは創作史の範ちゅうに含まなければならないという指摘ができる。¹⁰⁶そこでカーソンは、編集史批評という言葉が異なった人々に異なった結論をもたらすことを承知した上で、創作をも含めた広義の意味に用いることを提案する。これはカーソン自身が創作を認めるからではなく、それによって生じる学者間のコミュニケーションを期待しているからである。¹⁰⁷福音主義神学者たちが編集史批評という言葉を変通したり、それを明確に定義付け、方法論を確立することは、現状としては不可能なのである。

それではカーソン自身は編集史批評というものをどのようにとらえているのであろうか。カーソンは編集史批評の背景、特に様式史との関係で編集史についてこのように言っている。“Redaction criticism, so understood, studies the final form of the text by focusing on connecting links, changes made to underlying sources, the selection of such sources, and the like.”¹⁰⁸これはカーソンの編集史の定義という訳ではないが、ここに彼の理解がいくつか表されている。第一にカーソンは、福音派のある学者たちがその不確かさの故に、福音書の背後の資料を前提としない編集史批評というものを考えるに對し、資料の存在と、福音書間の相互依存性は認める。聖書の記事とその背後の資料について、カーソンは三つの場合を考える。¹⁰⁹一、第一、第二歴代誌が第一、第二サムエル、第二列王記を資料としているように、明らかな相互依存性が認められる場合。二、依存性と多少の信頼できる資料は認められるが、その依存関係が複雑ではっきりしない場合。共観福音書はこの好例である。三、資料の存在を仮定できずから資料を掘りおこすことにすぎない。一の場合、編集史は他の二つよりも有効に働く。三の場合、それは反証はあげられないが狭い、学的信頼性のない学派の、自己循環してしまふ仮説になる可能性がある。編集史の用い方が最も難しいのは二の場合である。ここでカーソンは一つの提案をする。背後の資料や相互依存性を問題にするのではなく、テキストそのものに焦点をあて、その比較に集中するということである。不確かなことはそのままにして、平行記事と比較することによって聖書理解をより豊かにしていこうということである。すなわちカーソンは資料のない編集史というものを認めてはいないが、その方法は、仮説にすぎない批評学に基づいたものではなく、テキスト中心主義である。

それではカーソンは福音書間の調和についてどのように考えているのであろうか。福音書の全ての違いを完全に説明しつくすことはカーソンでなくとも不可能であろうが、次の言葉は彼の前提を示している。“…… I am an in-

nerrantist, and I always look for the common truth rather than differences.”⁸³

また別の所で彼は一つ一つの福音書がそれ自体としては不完全で、お互い補い合わなければならぬという考えに反対している。福音書はもともと並べて読むように書かれたのではなく、それぞれが独立して完全なものなのである。⁸⁴

調和の問題についても、カーソンはいくつかの手がかりを示唆している。一つはカーソンも福音書に記されているイエスの言葉について、*ipsissima verba* (イエスの言葉を文字通り)ではなく、*ipsissima vox* (イエスの声のレパート、すなわちイエスの意図したところを正確に伝えている)と考えていることである。⁸⁵しかしそれはカーソンが、ある福音派の学者たちのようにイエスがその言葉を言った場面の設定は、福音書記者が行ったと考えているという意味ではない。彼はイエスの言葉、それが告げられた場面、設定の両方の歴史性を守ろうとするのである。そのためカーソンは他の学者たち以上にイエスが巡回説教者だったことを強調する。⁸⁶福音書の中で、異なった時、異なった場所でイエスの同じ説教が記されている、それによってどちらかの歴史性を疑う必要はない。イエスはあちこちを巡回して違う聴衆に同じ話をしていたことは大いにありうることだからである。

これらの主張が共観福音書問題のすべてに答える訳ではないにしても、福音書間の違いを正視しつつ、聖書の靈感を信じる私たちが示唆されることは大きい。

C グラント R・オズボーン

G・R・オズボーン (Osborne) は、カーソンと同じくトリニティ神学校の新約学の教授である。彼は今日、福音派の中で編集史批評を用いることに最も熱心な学者の一人であると言えよう。

オズボーンの前提も、福音書の歴史性を擁護すること、福音書の記事が事実に基づいているところにある。しかしその歴史性が、二十世紀の私たちの考えるのと同様の定義を持つか否かに関してオズボーンは疑問を投げ掛けるのである。⁸⁷その意味で彼が一番最初に編集史を適応した“Redaction Criticism and Great Commission”は、彼の編集史理解と、福音書の歴史理解をよく表したものであるが、これについては後述する。

オズボーンは、米國福音主義神学誌などで編集史について雄弁に語っているが、その中で編集史批評の否定的前提、すなわち編集史は様式史批評をその親としてもつので、その発生において編集史が史的イエス探求の新しい道だったことを認める。⁸⁸

しかし、オズボーンはむしろ、この有効な“Tool”によって、福音書記者の神学という、新しい福音書研究の道が開かれたことを積極的に評価し、様式史とは非連続の福音主義的編集史批評を指向している。福音書記者の編集を認めるということによって、テキストの真正であることを明らかにしながら共観福音書を扱うのに柔軟性が与えられた。⁸⁹オズボーンの考えによれば、記者の編集は、イエスの言葉と同じく神の言葉なのであるから、何かより真正なものがあるかのごとく、聖書の中に、史的イエスの真実に語った言葉を探してはならない。⁹⁰

このオズボーンの言葉は、様式史批評と編集史批評の連続性を切ると同時に、彼の無誤性理解を示している。オズボーンは共観福音書の記事の違いを正視しているが、それがいずれも誤りなき神の言葉であるとは、第一に史実の描写も、記者の解釈もともに靈感を受けた神の言葉であるということの意味している。第二に、オズボーンも、聖書に記されているイエスの言葉を *ipsissima vox* であつたと主張している。

福音派の中で *ipsissima verba* を主張している2つのグループの人々がいる。⁹¹オズボーンはむしろそれらの人々に反論している。一つはスカンジナビアのH・リーゼンフェルド (Riesenfeld) やB・ゲルハルドソン (Gerhardsson)

で、彼らはイエスの弟子たちがラビのやり方にしたがって、イエスの言葉をそのまま正確に伝承していったと考えた。またH・シュールマン (Schurmann) や編集史を用いる前のガンドリイは、弟子たちがイエスの言葉を注意深くノートにとったと考えた。けれどもオズボーンによれば両方とも同じ事件を記した福音書の記事の違いを説明するに失敗している。⁸² 第一にイエスはアラム語を話していたのだから一語一句が正確に残されることはない。第二に既述のように、福音書記者は創作はしなかったにしても、教会の状況にイエスの言葉を適応する裁量があった。

このオズボーンの編集史理解を最も端的に示している聖書解釈が “Redaction Criticism and the Great Commission” という論文に見出される。その中で彼が主張したことは、マタイ28章16でイエスが弟子たちに「三位一体の名によって洗礼を授けることを命じておられるのは、イエスが最もと唯一の名による授洗を命じておられたのを、マタイがその時代状況に合わせて三一の形に改めたのだということである。これは何もマタイが三一の形を創作したのではなく、イエスはその御生涯の間、マタイ28章18〜20のこのような教えを繰返しながらきたのをマタイがここに要約したのだとオズボーンは考える。彼は言う。

“I did not mean that Matthew had freely composed the triadic formula and read it back onto the lips of Jesus. Rather, Jesus had certainly (as in virtually every speech in the NT) spoken for a much longer time and had given a great deal more teaching than reported in the short statement of Matt. 28:18-20. In it I believe that he probably elucidated the trinitarian background behind the whole speech. It was compressed by Matthew in the form recorded. Acts and Paul then may followed the formula itself from ‘the commission speech, namely the monadic form.’”⁸³

このオズボーンは、イエスが昇天前、弟子たちに宣教命令を出されたことを否定しない。またイエスの思想の中に三一の名による授洗があったことも否定しない。しかし、ここでオズボーンが行っていることは、カーソンにおいては警戒され、否定されていた、福音書記者による状況設定である。一部の聖書学者たちは共観福音書の違いを説明するために、「いつ、どこで、イエスがそれを言ったか」という “setting” の史実性を二義的なことと考える。イエスは確かにその御生涯の内にそれを語られたのであるが、記者はそれを自らの神学テーマによって自由に福音書の中に織りなしていったと考える。カーソンにとっては、イエスが巡回伝道者であり、色々な場で同じ教えを繰返されたことが、この問題の解決のために大きな比重を占めているが、オズボーンにとってはそうではない。⁸⁴

このオズボーンの立場に対し米国福音主義神学会の中には様々な議論が起った。J・W・モンゴメリー (Montgomery) はオズボーンの立場は、福音主義神学会の教義的立場と相入れないと考える。モンゴメリーによればこれはイエス像の歴史的信頼性を失わせるものである。⁸⁵ しかし ipsissima verba を守らうとするモンゴメリーよりも、むしろオズボーンの霊感理解から示唆を受ける人々もいるようである。⁸⁶

ただ一つ言えることは、多くの米国福音主義神学会の会員たちがオズボーンの編集史批評の用い方、霊感理解は「楽観的過ぎる」と指摘していることである。⁸⁷ 米国福音主義神学会の許容する編集史批評は、このオズボーンの理解と受容いかにかかっていると言っても過言ではないであろう。

Dロバート H・ガンドリイ

ガンドリイは、カルフォルニア州にあるウエストモント大学で宗教学を講じている。彼が米国福音主義神学会を脱会するまでの経緯は序論の項で述べたが、問題となった “Matthew: A Commentary on His Literary and Theological Art” を出版した⁸⁸ 彼は “The Use of the OT in St. Matthew’s Gospel” など⁸⁹ 福音主義の新約学

に大きな貢献をなしてきた。それだけに彼の脱会の与えた衝撃は大きかった。

ガンドリーは、自らの立場をマタイ福音書の注解の最後の部分、"A Theological Postscript"の中で述べている。それによると、彼は聖書の靈感を疑っているのではなく、共観福音書間にある違いを、聖書の權威を守りつつ説明し、真に聖書の教えることに近づこうとしたのである。⁸³そこで、彼が福音書間の違いを説明するためにその注解書で一貫して用いた方法とは、福音書のミドラシユ的解釈である。このミドラシユについて、ガンドリーは明らかに定義していないが、ユダヤ教の文学ジャンルの一つで、主に旧約聖書の解釈に用いられた形態であると言っている。福音書をミドラシユとして理解しようとする試みは、ガンドリーに始まったものではなく、パーミンガム大学のM・D・ゴルダー(Goulder)の"Midrash and Lection in Matthew"をその最初のものとしてあげられる人は多い。⁸⁴ガンドリーもゴルダーの影響を受け、マタイはミドラシユという手法を用いてその福音書を書いたと主張している。

この時ガンドリーにはいくつかの前提となる思想がある。第一に、ガンドリーはマタイが資料としてマルコと拡大Q(普通Qと思われるもの)他に、イエスの誕生物語とルカ資料と言われているいくつかのたとえ話を含む)を用い、それにミドラシユ解釈を施したと考える。第二に、そのためガンドリーはマタイ的と思われる用語、構成、神学的強調、OTからの引用などを統計的に用い、それを根拠としてマタイによる創作、編集を論じる。

例えばガンドリーによると、マタイ二章で東方の博士が誕生したイエスを拝みに来る箇所は、マタイが持っていたルカ伝承(ガンドリーによるとQ)にミドラシユを施したのだという。すなわちルカにおけるユダヤ人の羊飼いが、マタイによって異邦人の博士たちに変えられ、ルカの天使と主の栄光はマタイでは星に、エルサレムでささげられた犠牲「山ばと」一つがい、または家ばとのひな二羽⁸⁵(ルカ2章24)は、ベツレヘムでのヘロデによる幼児殺害に変更

された。マタイがQにこのような大掛りな改ざんを加えたのは、マタイの神学テーマの一つである、異邦人も教会に入れられることを示すためであり、またユダヤ人によるイエス殺害を予表するためである。⁸⁶

しかしガンドリーにとって、この、マタイによる伝承の改ざんもしくは物語の創作は、何も聖書の權威を覆すような主張ではない。ガンドリーの言うところに従うと、おそらく一世紀にマタイの福音所を読む人々は、マタイが当時流布していたイエスの誕生物語にミドラシユを施したことをすぐに理解し、マタイの記述に文字通りの歴史を期待しなかった。今日の私たちもイエスがたとえ話をされる時、それが特定の時、特定の場所で起こった事実であると思っていないように、マタイの福音書もミドラシユという文学ジャンルとして理解されるべきであるとガンドリーは言う。⁸⁷

これに対し、このような福音書理解が果たして聖書の靈感という観点に合致するのかわきりないかという問いかけが米国福音主義神学会だけでなく、多くの所からなされた。以下にその主なものを記してみよう。⁸⁸

第一は、ガンドリーのミドラシユ理解に関するものである。これに関しては米福音主義神学誌上でなされた論議よりも、ガンドリーの注解の翌年、イギリスで出版された"Gospel Perspectives"の第三巻、"Studies in Midrash and Historiography"から紹介するのが適当であろう。この書はその題の如く、ミドラシユとその歴史性の問題を正面から扱っている。

ガンドリーは、マタイ注解の中でミドラシユの定義を全く行っていない。それにも拘らず彼のミドラシユ理解で唯一ハッキリしているのは、それが歴史と非歴史の混合だということである。これに対し、"Gospel Perspectives"はミドラシユが我々の考えるよりも遙かに旧約聖書の引用および解釈において本文に忠実であったこと、少なくとも伝承を重んじていたことを指摘する。資料が不十分で、決定的なこととは言えないにせよ、ガンドリーが主張するような

マタイの「ミドラシユ」は、同時代のユダヤ教文学に全く類似の例を持たないことを実証することに成功している。ガンドリーに対する批判の第二は、その統計の用い方である。例えばガンドリーはマルコとルカの平行箇所がない語はマタイ的であると即断する。そしてマタイがマタイ的用語を伝承に挿入する時、それをもってマタイの神学を計ろうとする。

しかし統計ほど解釈に左右されるものはない。米国福音主義に属するD・J・ムー(Moo)はこの点を批判して、ガンドリーのように段落ごとに用語の分析をしていくのではなく、一文ごとにそれを行ってみて、ガンドリーとは異なった結論を得たという。マタイの福音書は一〇七〇語から成っている。もしマタイで五回用いられている言葉を、マルコが二回しか使わなかったとすれば、それをもって「マタイ的」と言えるであろうか。しかしガンドリーはこれ「類することをやっている」。

第三の点は、ガンドリーが二資料説に依存し過ぎていることである。現在の新約学会ではこの二資料説を支持する動きが大勢であるとはいえず、すべてのマタイ神学をこの仮説の上に立て、「マタイがここでマタイ的用語を使用しているのは、マルコ又はQにミドラシユを施しているのである」という主張は、あまりにも不確かな、砂の上に築いた一大仮説にすぎない。一体、イエスの生涯の目撃者であったマタイが、それほどまでに資料に頼り、史実を変更したであろうか？ ガンドリーはマタイが出来事の正しい解釈を読者に伝えるためにミドラシユを行ったというが、果たして当時の読者のどれ位が、マルコ及びQ伝承を知っていて、マタイ福音書はそのミドラシユだと理解できたであろうか？

このようにガンドリーの前提としたところは、すべて仮説である。ガンドリーの方法論はこの仮説の上に立った、見事に一貫した編集史的手法であった。このことの故に、その前提が崩れ去る時、それは時代の流れに耐え得る注解とはなり得ない。

二、編集史批評の使用の実際 マタイ二八章一六〜二〇より

この章では、編集史を用いないトーマスのような最も保守的な人々を除いて、先に挙げたカーソン、オズボーン、ガンドリーの三人において編集史が実際にはどのように用いられているかを観察し、三者を更に理解する助けとした。テキストにはイエスの大宣教命令の箇所を取り上げる。⁴⁴

まずこの箇所全体が三人の注解者がどのようにとられているかを紹介したい。

カーソンはこの箇所が従来、賛美歌、公式の神命、新契約の宣言、旧約に見られるアブラハム、モーセらの召しに類似するものなどと考えられてきたことを紹介し、しかしどのような既製の文学フォームにも合致しない独自のものであると結論づける。その上でマタイがあまりに自由な編集によって伝承を全く変えてしまったという意見にも、全く編集を行っていないという意見にも反対する。カーソンが、この箇所で唯一編集史を用いている箇所は、一七節のコメントだけで、そこでは福音書記者が、知っていること、持っている伝承の全てを書いた訳ではなく、取捨選択をしたということ述べている。

オズボーンは最初からこのペリコーペが創作か伝承かという疑問を投げ掛け、そのギリシア語の使い方、神学思想が他の福音書にパラレルを持っていることを証明する。次にその背後にある伝承が一つであるか、いくつかの伝承を結びあわせたものであるかという疑問を投げ掛け、おそらくマルコの失われた結論部分の一つの伝承をマタイが自分

の言葉、スタイルで著したのであるかと考える。

ガンドリーもこのペリコーペはマルコの失われた結論部の編集だと考える。マタイは、マルコ伝承にイエスがモーセよりも偉大であること、イエスが神であることなど自分の神学を織込んだ。

こうした三者の前提の違いは、当然テキストの解釈の違いとなって表われる。このテキストで最大の問題となるのは、やはり三位一体による授洗の命令であろう。問題は新約聖書の中に、三位一体の神の名が並べ記されている箇所はあるが（Iコリ12章4〜6、IIコリ13章14、エペソ4章4〜6、IIテサ2章13〜14、Iペテロ1章2、黙示1章4〜6）、洗礼を授ける記事ではいつもイエスのみの名による洗礼であることである（使徒2章38、8章16、10章48、19章5）。

カーソンはこの解釈に編集史批評を用いていない。彼は、初代教会以来三位一体の御名による洗礼が実施されていたのは、イエス御自身の言葉にそれを帰するのが一番自然であると指摘する。彼はE・リー・ジェンバツハ（Riggenbach）を引用し、ディダケーと同じくらい古い時代に、イエスの名による洗礼と三位一体の名による洗礼が平行してあったという事実を重視して、イエスがこれを洗礼の定式として命じた可能性は薄いという。少なくとも初代教会は、これを強制力のある洗礼定式とは理解していなかったと考える。

オズボーンの解釈は彼を取り扱った項でも紹介したとおり、イエスが昇天前に三位一体の御名による洗礼を命じた事実はないが、本来イエスの名のみによる授洗の定式を、マタイがイエスの真のメッセージを伝えるために拡大したというものである。マタイがなぜここで三位一体の御名による洗礼定式を用いたかについて、オズボーンは以下のように説明する。それは高挙のキリストがすべての権威を待っていることと関係している。弟子たちが完全な神的活动に参加していることを示すために、マタイは神のそれぞれの位格を強調した。マタイはここで文字通りには、三位一体の名に入れられる洗礼を³⁶という前置詞を使って示しているが、これは神の人格との交わりにいれられることを意味する。オズボーンの理解によれば、これはイエス御自身が言った言葉ではないかもしれないが、イエスの意図されたことをマタイが正確に伝えたもので、広い意味でイエスの言葉に起源を持つと考えられている。

ガンドリーはこれに比べるとマタイの神学を強く主張する。彼によればこの箇所は、マタイが三位一体を強調するためにイエスの受洗物語を編集した箇所である。イエスが洗礼を受ける時も、マタイは「神の御霊」という表現を用い、三位一体を強調した。マタイはイエスの受洗と、後のクリスチャンの受洗の連続性を確立するために、このイエスの宣教命令をこのように編集した³⁷のである。ガンドリーは言う。「Therefore Matthew seems to be responsible for the present formula.³⁸」

さて、この3人を見ていくときに、カーソンの理解は編集史を用いていないが、説得力のある注解となっている。新約聖書の中で三位一体の名による洗礼がここだけであるのに、後の教会でこれほどまでに一般化したのは、確かに聖書の書かれた時代には、それが現在の式文のように確定したものととらえられていなかったことを示しつつ、イエス御自身にその起源を帰さなければ、その普及を説明できない。

オズボーンの理解も、ある種の説得力を持つが、そこで問題となるのはやはり、設定、の史実性の問題であろう。オズボーンはこの言葉が間接的にイエスに起源を持つことを認めている。すなわち、それはイエスがその生涯の中で、弟子たちに教えてきたことであった。しかし、それはイエスが三位一体の神の名による洗礼を、そのままの形で命じたという意味ではないし、ましてやイエスが昇天前にこれを言ったということでもない。むしろオズボーンによれば、この設定にイエスのこの言葉をはめ込んだのはマタイである。それはこの状況をマタイが創作したことを意味する。そしてこれがオズボーンによれば、聖書の靈感説と矛盾しない編集史の実践である。

ガンドリーの場合は、この言葉自体にマタイの創作を示唆し、しかし尚、聖書が神の言葉であることを主張するために、この箇所でも多くの言語統計を用いてマタイ的用語を特定し、これはミドラシユであるがゆえにもともと史実であることを意図されていなかったという。

しかし、このガンドリーとオズボーンに対し、D・L・ターナー (Turner) の指摘を考慮に入れることは有益であろう。⁴⁰ターナーは28章18におけるマタイの言葉使いは、直接引用の導入句である可能性が高いことを示す。すなわち “*καὶ προσεβόη ὁ Ἰησοῦς ἐλάλησεν αὐτοῖς λέγων, …*” の中の分詞 “*λέγων*” はヘブル語の “*lemon*” から来ており、それは直接引用をする時に用いられる語である。この福音書を書いたのが、その場にいた一弟子 (一六節) の一人マタイであることを考えると、マタイが創作した、又は編集したイエスの言葉に、故意にそれほどの臨場感を持たせたと考えるよりは、イエスの言葉をそのまま引用したと考えるほうが自然ではないだろうか。

この一箇所だけの注解から、全てを論じることにはできないが、ガンドリーの注解はトータルな編集史的注解であるので、すべての記事の背後に資料が要求され、却って不自然な注解となっている。オズボーンは、三位一体の授洗命令が、他の聖書の箇所にはないが、イエスにその起源を持つことを示そうとして記者の状況設定を認める編集史を用いた。しかし、そうだからといって、この言葉の起源がイエス自身にあることを完全に証明することに成功しているわけではない。その意味で、編集史を用いなかったカーソンや、ターナーの方が正面からその問題を取り上げ、一応納得できる説明をしているのは興味深い。

編集史批評は、ある時には非常に有効な聖書解釈の道具であるが、いつもそうであるという訳ではない。他の方法とのバランスをもって用いることが大切である。

【結 論】

聖書には四つの福音書があり、四人の福音書記者がイエスの生涯を描いた。その内マタイ、マルコ、ルカの各福音書はある時は非常に似ていて、時には一字一句まで同じであるのに、ある時は非常に違っている。同じ事件を記していると思われる場合も、時や場所という設定が違っていたり、イエスの言葉が違っていたりする。編集史批評はこの違い、を説明するため、現在最も注目を集めている方法論の一つである。本論のそれぞれの項で扱ってきた研究者たちも、この違いを説明しようと試みている。

R・トーマスは編集史を全く用いない伝統的な歴史的・文法的方法を固守しようとする。編集史のもつ前提が危険すぎるからである。確かに編集史は様式史批評から生れた批評学であり、その意味で福音書記者の描くイエスと史的イエスの連続性を保障しない。

しかしながら、編集史批評は現在の聖書解釈学に、あまりにも大きな影響力をもっており、もはや無視することはできない。また聖書解釈に新しい視点を与え、貢献をなしてきたことも事実である。

そこで福音派の学者たちの間でも、聖書の無誤性と無謬性を守りつつ、編集史を用いていこうとする試みがなされてきた。D・A・カーソンとG・オズボーンはその代表とわいていであろう。この二人は、編集史の一つの “*Tool*” として、他の多くの解釈の手法と同時に有効に用いていこうとする。

しかしカーソンの編集史の用い方と、オズボーンの編集史の用い方は、かなり違っている。カーソンの史実性の定義は、オズボーンよりも厳密である。すなわちカーソンは、イエスがいつ、どこでそれを言われたかという設定の歴

史性も守ろうとするに對し、オズボーンはそれを二義的なものとする。このオズボーンの立場が、聖書の無謬性はともかくとしても、無誤性を論じる時にそれと矛盾しないかという問題は考慮の余地がある。

このような立場の違いを包含しながら、米国福音主義神学会はそれを受容してきた。むしろオズボーンなどは精力的に、編集史を用いることや福音書の文学ジャンルに関する発表を、学会内外で行っている。今のところ、あまり表だって問題にされていない無誤性と福音書の記事の設定の関係、すなわち福音書の記述に、現代の私たちの定義づける意味での「歴史性」をどの程度期待できるかという問題が残されているので、今後の同学会の対処の仕方に注目したい。

ガンドリーの脱会後、米国福音主義神学会における編集史批評の使用に、一つの限界を示すものであった。たとえば福音書の文学ジャンルをミドラッシュと特定したとしても、福音書の記事を史実に基づいたものとせず、福音書の起源をすべて記者に帰することは、福音派の聖書観と合入れない立場である。記者の編集を認めつつ、聖書の歴史性を守ることが、現在の米国福音主義神学会の許容する編集史批評の実態である。

編集史批評は、はっきりした形であるにせよ様々な注解書を通して有形無形の影響を私たちにもらしている。それをトーマスの言うように、従来歴史的・文法的方法に備わっていた手法だと言つこともできるかもしれないが、編集史批評の貢献によって聖書釈義の方法の内、福音書記者の神学に注目するという見方が市民権を得つつあるように思われる。

しかしそこで絶えず問題となるのは、聖書を神の言葉と信じる私たちの、信仰との関わりにおける編集史批評の用い方である。時としてそれは、神の言葉を私たちの常識に押込める道具として用いられている。

出発点は福音書間の「違い」であった。ある人々はそれを「矛盾」ととって、合理的な説明を求めようとする。しかしそこには「違ふから、いずれか又は全部がイエスの言葉ではない」という前提がある。確かに現代的な意味でそれがイエスの言葉であることを証明することは不可能である。しかし逆に、それがイエスの言葉ではないと言つことも不可能である。この意味で、私たちは編集史批評も他の方法と同様、一つの聖書理解を助ける道具として、絶対化するこなく、謙遜に用いついかなければならない。

註

- (1) カンタベリー聖書の註釋について、米国福音主義神学会副理事長、現書記の G. J. キンチーカー氏の談にちなむ。
- (2) "Redaction Criticism: Is it worth the Risk?" *Christianity Today* (Oct. 18, 1985), p. 2-1.
- (3) Philip B. Payne, "Midrash and History with Special Reference to R. H. Gundry's Matthew" In R. T. France, D. Wenham (ed.) *Gospel Perspectives*, Vol. 3 (JSOT Press, 1983) p. 177. U.S. G.P. & T. Co. の註釋や "It is one of the most detailed redaction critical studies of Matthew ever done." *Journal of Theology*.
- (4) ノーベン・ギリン「編集史とは何か」(モルゲン社 一九八四年) 五六頁。
- (5) *Christianity Today*, 8-1.
- (6) *Ibid.*
- (7) Robert Thomas et al., "The Evangelical and Redaction Criticism in the Synoptic Gospels" *Talbot Review*, Vol. 1, No. 2 (Summer 1985) p. 7.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.* pp. 7f.
- (10) *Ibid.*, p. 8.
- (11) *Ibid.*, p. 7.
- (12) *Ibid.*, p. 10.
- (13) *Christianity Today*, 7-1.

90 ハートマン・ヤニハ『聖書改訂の歴史』1-2編。

91 Stephen S. Smally, "Redaction Criticism" In I. H. Marshall (ed.) *N. T. Interpretation: Essays on Principles and Methods*, Grand Rapids: Eerdmans, 1977, p. 181.

92 D. A. Carson, Redaction Criticism: The Nature of an Interpretive Tool. *Christianity Today Monograph* No. 1 (Christianity Today Inc., 1985), p. 10.

93 *Christianity Today*, 6-1, 7-1.

94 Carson, RC: *The Nature of an Interpretive Tool*, p. 6.

95 *Ibid.*, p. 13.

96 *Christianity Today*, 6-1.

97 Carson, RC: *The Nature of an Interpretive Tool*, p. 16.

98 *Ibid.*

99 *Ibid.*

100 G. R. Osborne, "The Evangelical and RC: Critique and Methodology" *Journal of Evangelical Theological Society* 22/4 (Dec. 1979) p. 305-309.

101 Osborne, "Round Four: The Redaction Debate Continues JETS 28/4 (Dec. 1985), p. 400.

102 Osborne, *The Evangelical and RC*, p. 311.

103 *Ibid.*

104 S. J. Kistemaker, *The Gospels in Current Study* (Grand Rapids: Baker Book House, 1980), p. 47. & p. 100.

105 Osborne, *The Evangelical and RC*, p. 312.

106 *Ibid.*, p. 311.

107 Osborne, RC: An Evangelical Perspective, JETS.

108 J. W. Montgomery, *Fuzzification*, p. 221.

109 D. L. Turner, "RC and Inerrancy: Three Evangelical Attempts to Correlate Theology and History in the Synoptic

Gospels", Paper read at the 34th annual meeting of the ETS, 1982, p. 19.

110 *Ibid.*, p. 21.

111 R. T. Gundry, *Matthew: A Commentary on his Literary and Theological Art* (Grand Rapids: Eerdmans, 1982), p. 623f

112 cf. Bruce Chilton, "Varieties and Tendencies of Midrash: Rabbinic Interpretations of Isaiah 24·23", In France and Wenham (ed.), *Gospel Perspectives* Vol. 3.

113 長田保雄博士『マテウ福音の聖書神学』266-270頁 M. D. Goulder, *Midrash and Lection in Matthew* (London: SPCK, 1974), 卍 *The Evangelist's Calendar* (London: SPCK, 1978), J. Drury, *Tradition and Design in Luke's Gospel* (London: Darton, Longman & Todd, 1976) 244-245頁。

114 Gundry, *Matthew*, pp. 26ff.

115 *Ibid.*, pp. 623ff.

116 マテウ福音の聖書神学 Vol. 3 92頁 D. A. Carson, "Gundry on Matthew: A Critical Review," *Trinity Journal* 3 (1982), pp. 71-91; D. J. Moo, "Matthew and Midrash: An Evaluation of R. H. Gundry's Approach" "Once Again, Matthew and Midrash: A Rejoinder to R. H. Gundry", JETS 26 (1983) pp. 31-39, 57-70; N. L. Geisler, "Methodological Unorthodoxy" "Is There Madness in the Method? A Rejoinder to R. H. Gundry," JETS 26 (1983) pp. 87-94, 101-108. ヲボドボド' マテウ福音の聖書神学Ⅱの緒言や巻頭トリス。 A Response to Some Criticism of Matthew: A Commentary on his Literary and Theological Art (Unpublished Material) "A Response to Matthew and Midrash"; "A Surrejoinder to D. J. Moo"; "A Response to 'Methodological Unorthodoxy'"; "A Surrejoinder to N. L. Geisler" JETS 26 (1983) pp. 41-56, 71-86, 95-100, 109-115.

117 ヲの編成の歴史を研究する D. A. Carson, "Matthew", In F. E. Gaebelin (ed.) *Expositor's Bible Commentary* (Grand Rapids: Zondervan, 1984), pp. 591-599; G. R. Osborne, "Redaction Criticism and the Great Commission: A Case Study toward a Biblical Understanding of Inerrancy," JETS 19 (1976) pp. 73-85; Gundry, *Matthew*, pp. 593-597; 田・ナカエ・ヤニハ『マテウ福音の聖書神学』【マテウ福音の聖書神学】(マテウ福音の聖書神学) 一九八六年) 中三三三~三三三頁 マテウ福音の聖書神学【マテウ福音の聖書神学】(マテウ福音の聖書神学) 一九八六年) 中三三三~三三三頁

八十年)六〇一〜八頁。

⑧ Gundry, *Matthew*, p. 596.

⑨ D. L. Turner, "RC and Inerrancy," p. 20.

(改革派甲子園教会會員)